



Title	書芸術の地平：その歴史と解釈
Author(s)	萱, のり子
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.11501/3143695">https://doi.org/10.11501/3143695</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	萱 の り 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 3 4 9 5 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 9 年 12 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科 芸術学専攻
学 位 論 文 名	書芸術の地平 —その歴史と解釈—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 神林 恒道 (副査) 教 授 肥塚 隆 教 授 上倉 庸敬

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は言葉の営みと、造形的な営みを契機として成立してきた「書芸術」を、その伝統的な在り方と同時に、近代的な意味での芸術としての自律という両側面から、これをいかに解釈すべきかという問題意識から出発している。本論文はこうした現状をふまえて、書芸術の特色を「書く」、あるいはそこから生じる「筆意」という問題に着目しつつ、これまでになかった新たな「書の美学」の確立を目指した意欲的な研究である。

全体の構成は三部からなっており、「第一部 中国の書」は、「第一章 造形理念」、「第二章 自然の実現」、「第三章 書の抽象性」、「第四章 筆意を読む」の四章構成であり、「第二部 日本の書」は、「第一章 仮名の美の端緒」、「第二章 和歌と女手の結ばれ」、「第三章 作品世界の形成」、「第四章 書表現の自律」からなっている。第一部では表意文字としての漢字からなる「中国の書」を扱い、第二部では漢字から派生した表音文字である仮名を、いわゆる女手とよばれる手法によって造形化する「日本の書」を扱いつつ、なおそこに両者が共通して書の芸術の名で呼ばれる所以はどこに認められるのかを論じている。「第三部 線と形象の営み」は、「第一章 書における線の意味」、「第二章 書と近代」、「第三章 作品の在り方」、「第四章 線・形象・時間」の四章から構成されているが、この第三部は、いわば第一部と第二部の分析から導き出された、書芸術の本質としての「書く」というキーワードを用いての、書芸術の現在についてその実効性を検証しつつ、現状を批判しようとしての試みであると見ることができよう。

論者はこの「書く」ということの本源的意味を次のように述べている。「書くという営為を拠点とすることによって、明らかにできたことは、線と形象の相即性、およびそこから引き出される書の一回的性格の意義である。筆を執って書かれる以前、筆の軌跡が線として定着される以前には、書の形象はどこにもない。書くという表現運動を通してはじめて、そこに書という形象が成立する。その表現運動は、一連の有機的な身体活動とともに現れる。書の特徴は、内的身体的運動の過程が形象の関係づけとして可視化されるということにあるのである」と。

## 論文審査の結果の要旨

書芸術は東洋固有の芸術である。ところでこれまで書の芸術性について議論は、もっぱら書道史の視点からに限られてきており、普遍的な「芸術」という視点からなされてきたものではない。グローバルな立場から書の芸術性について論じた「美学」といえば、唯一井島勉の『書の美学と書教育』があるのみである。

本論文がまず評価されなければならないのは、その後絶えて論じられることのなかった「書の美学」を、改めて現代の美学・芸術哲学を背景として、そこに伝統的な「書論」を読み解くことを通じて再生しようとしたことにあると言えるであろう。さらにこの論文について注目すべきことは、表意文字としての「漢字」だけではなく、そこからわか国で表音化した「仮名」の芸術性を、同じ書芸術として捉えようと試みている点である。

そこで論者が注目しているのが、「一画の哲理」に基づけて、表意あるいは表音の区別を越えて、「書く」という造形的な営みのなかに「筆意を読む」という着想であった。これが、本論文を貫くモチーフとなっている。確かにこの企てによって「第一部 中国の書」と「第二部 日本の書」は互いに、オーガニックな「書芸術」というひとつの美的理念において結ばれている。「第三部 書と形象の営み」で論者は、逆に近代的な意味での芸術性をあまりに意識しすぎた書の在り方について、「筆意」に通じる「書く」ということの根源的な意味において、これを批判的に論じている。さらにまた日常的に「書く」という営みが失われつつある現代の状況にまで思いをめぐらしている。

これに加えて別の視点からすぐれていると見なされるのは、論者が単なる理論家ではなく、実践的な書家でもあるということから端的に示される、和漢の書芸術についての的確な分析と美術史的記述である。このことは、本論文が単なる抽象的理論ではなく、体験に裏打ちされた実証的な研究の成果でもあることを証明するものである。

これらは本論文のすぐれた点として指摘してきたものであるが、論文の構成の細かな点を逐一見ていくなれば問題なしとは言えない。たとえば、同一論文でありながら、引用文献の異同が定かでないこと、書論を分析するにあたって自論を展開するに急であるがために、テキストの読み方が若干不正確なところが見受けられること、また同じ性急さが、書の時間性をめぐる現代の美学あるいは芸術理論の運用についても認められる。

とはいえ、本論文のこれらの不備も、それを越える多くのすぐれた考察によってすでに十分に補われていると思う。よって本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものとして認定する次第である。